平成21年度　学校自己評価表（最終評価）

中長期目標（学校ビジョン）	「倉吉東高のかたち」の理想に沿って、本校の教育活動を更に充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。

今年度の重点目標	1 「倉吉東高のかたち」に沿った学校文化度の向上 2 教育力の向上 3 学校評価の充実 4 進路指導の充実 5 専攻科教育の充実 6 定時制教育の充実

年度当初					中間評価結果（ ９ ）月			最終評価（3月）		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	後期の改善方策（それに対する評価）	中間評価以降の経過・達成状況	評価	次年度に向けての改善策
1．学校文化度の向上	規律ある生活と「文武両道」	・全校遅刻0。 ・指導7項目の遵守。 ・生徒自身が主体的に環境整備や規律徹底に向けて行動している。 ・全員が部活動に加入し、積極的に活動しながら、切り替えを上手に行い、勉学に励んでいる。 ・自分の置かれた立場や場面に相応しい言動ができる。 ・校内に品位と落ち着いた爽やかな雰囲気が感じられる。 ・教員に「率先垂範」の姿勢が浸透している。	・全校遅刻0の日、昨年度5日。（一昨年3日） ・制服の着こなしに問題があったり、指導7項目が守れない生徒が一部に見受けられ、固定化する傾向がある。 ・部活動と勉学の切り替えがうまく行かず、家庭学習時間が減少する生徒や課題提出に問題のある生徒がある。	・定期的に駐輪指導・朝の立ち番指導を実施する。 ・教員が積極的に生徒に対するあいさつ、声かけを行う。 ・生徒会と連携して、生徒自身が自らの問題として意識するよう働きかけ、具体的な活動を引き出す。 ・外部指導者を含め、部活動顧問会議を開催し、部活動と勉学の切り替えについて具体的な方策を実行する。 ・必要に応じて、部活動顧問・担任・学年・生徒指導係が連携を取り合い指導を行う。	*・朝の登校状況は概ね良好で遅刻も少ない。（9月末現在、全校遅刻0、5日間）。* *・頭髪・服装等、生徒の大半は規律を守って生活している。* *・職員の指導もこまめに行われている。* *・一部ではあるが、駐輪場の自転車の置き方・勉学と部活動の両立・服装容儀・他に配慮した振る舞いができない生徒がいる。*	B	・放課後から家庭での過ごし方について、担任も部活動の顧問も協力して把握する。**(B)** ・「学力＝生活力」の認識のもと、職員の一層のベクトル合わせに努める。**(B)** ・教員側の「率先垂範」の意識を高める。**(B)** ・1限に授業のない教員が積極的に朝指導に関わる。**(A)** ・特に指導の必要な生徒に対し、教員からの積極的な働きかけ（面談・声掛け等）を心掛ける。**(A)**	・中間評価以降、遅刻0の日数は伸びなかった（年間5日）が、登校状況は概ね良好であるし、挨拶の状況も良好である。 ・指導の必要な生徒も一部あるが、教員の積極的働きかけによって、服装容儀・駐輪状況等、さらに改善されている。 ・後期になって、1，2年生の家庭学習時間が、昨年平均を徐々に上回るようになった。	B	・「学力＝生活」の認識の下、教員集団が、挨拶・清掃・時間前行動等、生徒と積極的に関わり、範を示す。 ・機会をとらえて、生徒が他の人の立場を考えさせる状況を作り出す。（率先垂範、面談、声かけ、朝指導等） （部活動と学習に関して） ・部活顧問・担任・外部指導者の研修会を実施する。 ・生徒会がリードしながら、部活顧問・担任・指導係が連携を密にする。
	中高連携の強化と高大連携の研究	・各中学校に本校の教育方針や教育内容が十分理解されていると同時に、本校も各中学校の教育方針・教育内容を十分理解しており、生活指導・学習指導について、中学・高校の連続性がある。 ・本校教育が目指す生徒育成のために、大学の教育内容を活用している。	・本校と各中学校の教育方針・教育内容・生徒指導などについて共通理解が不十分な点がある。 ・数学、体育以外の教科について連携があまり見られない。 ・高大連携について、英語（鳥取大学）以外は、大学紹介のレベルで終わっている。	・学校情報発信支援員の協力を得て、HPによる中学生向けの情報発信を充実させる。 ・中学生特別講座（英語に特化）への参加拡大を促進すると同時に、中学教員参加（参観、T－Tなど）を呼びかける。 ・中学校出前授業に積極的に応じる。 ・中学校説明会・進路LHRの機会を利用して、本校の理解が深まるよう工夫する。 ・大学教育の研究を進め、本校教育と連携できる内容を検討し、教員や生徒の参加体験受講を実施する。	*・中学校での出前授業・授業参観を実施した。* *・夏休みの「高校体験事業」で中学生400人弱対象に学校説明・授業体験を実施し、概ね好評であった。* *・東京工業大学・島根大学・岡山大学から講師を迎え、数学授業・推薦入試・キャリア教育について、中学教員と共に学ぶ機会が得られた。* *・中学と定期的に合同練習を行っている部がある。*	B	・中学生特別講座を有効に活用し、中学生の学習意欲を高めたい。**(A)** ・外部講師を招いての教科指導研究に中学教員も参加してもらえるよう働きかける。**(A)** ・後期も出前授業や授業参観の要請があれば積極的に応じる。**(A)** ・新しい学校紹介用のパンフレットの作成。（23年度学級減に向けて、次年度完成を目指す。**(C)** ・HPの中学生用ページを充実させる。**(C)**	・エキスパート教員による授業研究会実施や、中学の授業研究会に参加することによって、教科指導に関して中学教員と共に学ぶ機会が得られた。 ・ホームページの更新は出来たが、中学生用ページは満足できるものではない。 ・新パンフレットについては、まだ構想の段階である。 ・中学生特別講座の申込数もやや低調（68人）、一般入試志願者数も低調（219人）であった。 ・英語アカデミックインスパイアリング事業（鳥取大学英語講座受講）を実施した。	B	・中学校だけでなく地域・市町村教育委員会等を巻き込んだ、広報活動や情報発信を積極的に行う。 ・中学校説明会・進路LHR・出前授業に一層積極的に若手教員や生徒を派遣する。 ・専任者を選定し、学校案内とは別の中学生向けパンフレットの製作・発行とHPの中学生用ページの充実を図る。 ・中学生特別講座の継続と充実を図る。 ・大学案内・学部研究を超えた高大連携の研究促進を図る。
2．教育力の向上	「学習力」の向上と教科指導力の向上	・教員一人ひとりが、高い教科指導力を持ち、授業を通して各教科の魅力や奥深さを生徒に伝えることができる。 ・テストや大学受験といった実利的目的を越えて、生徒の学びが真理探究といった高次なものとなっている。 ・生徒の進路希望に応じて、時宜にかなった教科指導を行っている。	・生徒の学習を内発的主体的なものにまで高められていない。 ・生徒の学習が依然としてテストや課題に追われたものであることが多い。 ・生徒の志望大学に必要な学力レベルを的確に把握し指導できる教員がまだ十分とはいえない。	・教科内はもちろん、教科の枠を越えた授業相互参観を年2回時期を設定して行い、授業アンケートによって、授業改善を図る。 ・授業アンケートの「魅力を感じさらに学ぶ意欲が湧いてくる」の項目が高い数値を示すよう各人が工夫・努力する。また、数値の高い授業について、研修で取り上げ、その工夫を共有する。 ・教科指導先進校教師招聘事業をさらに積極的に実施・活用する。 ・予備校派遣研修を行い、活用できる指導ノウハウを取り込み共有化する。 ・教科指導先進校を視察し、個人はもとより教科全体としての指導力の向上を図る。 ・入試問題研究会に参加する。 ・各教科について、ブロック大学・難関大学・超難関大学の各志望者にどのような力が必要かを把握した上で、どの時期にどのような指導を行うかを高校3年間のスパンで記述し、共有化する。	*（学習力の向上）* *・放課後課外（3年）を生徒の現状に合わせて設定し、肌理の細かい指導ができ学力が向上した。* *・「学びの復権」LHRの実施し、「学び」の意味を深く考えることができた。* *（教員の教科指導力向上）* *・夏期休業中に国語・数学・理科の教員を予備校派遣した。* *・入試問題研究会に教員を派遣した。* *・教科指導ノウハウの共有化がまだ十分とはいえない。* *（研修内容の共有化含）* *・3年・専攻科合同課外を教員の指導力向上の場として活用している。* *・3年間を見通した教科指導計画と大学入試問題研究を各教科で進めている*	B	・学びの意義を折に触れて生徒に伝える。**(A)** ・文理学術クラスで集会をもち刺激を与えることによって、学年全体のモチベーションを上げていく。**(B)** ・学校の流れに乗っていればよいという安心感を持たせるだけでなく、自らの意欲や努力を高める指導を行う。**(B)** ・教科指導計画・入試問題研究の進行状況を定期的にチェックし、計画的に進行させる。**(B)** ・教科会・学年会・主任会での討議をこれまで以上に積極的に行い、それぞれの機能の活性化を図る。**(B)**	*（学習力の向上）* ・学術クラスは、学年を超えた集会、勉強会、さらに県主催の難関大合宿等により、主体的な学びを志向し始めた。 *（教員の教科指導力向上）* *・3年間を見通した教科指導計画と大学入試問題研究を各教科で進めている*が、完成していない。（不十分である。） ・生徒たちの「やらなければならない」という義務感を主体的な学びへと高めることができていない。（授業アンケート）	B	（教員の教科指導力向上） ・積極的な授業研究を行う。（優れた授業実践者の招聘と示範授業研究、県内外のエキスパート教員活用、教育大学をはじめとする公開研究授業への積極的参加、年間2回の研究授業旬間設定による一人2回の研究授業実践） ・大学入試問題研究（ブロック・難関・超難関別）を進め、改訂を行う。 ・予備校研修の継続実施により、優れた教科指導ノウハウを獲得する。 （学習力の向上） ・読書・小論文活動を軸においた、論理的思考力・表現力向上を図る。
3．学校評価の充実	第三者評価と学校関係者評価の有機的関連づけ	・第三者評価の結果や学校関係者評価を積極的に学校経営に取り込み、地域・同窓生・保護者から信頼される学校づくりを行っている。 ・学校教育目標を達成しようとして行っている学校経営を第三者評価が積極的に支援する方向で機能している。	・昨年度実施された第三者評価はやや学校診断的な評価として機能する方向へ傾いている。 ・第三者評価の結果を学校経営に取り込むよう努めている。 ・昨年度末の外部評価委員会での提言を学校経営に積極的に取り込んでいる。	・（第三者評価の提言を取り込む） 図書館のメディアセンター化を進める。 普通教科への外部人材の活用を検討する。 ・学校関係者評価委員会の提言を学校自己評価表に反映させ、積極的に取り組む。	*・図書館のメディアセンター化の第一歩として、司書が図書館での情報活用の仕方を授業（情報）で講義した。*	*	・情報検索に関する更なる整備を図る。**(A)**	・検索システム導入のための予算が獲得できた。	A	・図書館を情報発信の場とし、図書館ゼミナール等を行うとともに、情報検索システムを充実させ、学びの拠点とする。
	苅谷研究室による本校教育の検証推進	・「倉吉東高のかたち」に沿った生徒育成状況の検証がなされ、本校教育にフィードバックされている。 ・「倉吉東高のかたち」に謳っている生徒育成に本校教育が機能している。	・「倉吉東度」の育成状況把握が進行中である。 ・本校における教科指導、特別活動が目指す生徒育成に機能しているか検証中である。 ・研究結果が学校経営に生かせる状況に至っていない。	平成21年度3月に出されたアンケート結果をもとに、 ・苅谷研究室と連携を密にして、アンケート調査の完成度を高め、的確な分析を行う。 ・他校との比較を通して、本校教育のあり方を検討し、是正していく。	*・苅谷研究室からのアンケート集約に基づいた分析ができていない。*	*	（アンケートは継続実施中。今年度については、分析結果報告はなし。） （＊　評価については、現時点で行わず、最終評価時に実施）	・苅谷研究室からアンケート調査は継続実施中である。	*	・継続実施する。 （＊）について： 今年度分析結果報告がなかったため評価不能と判断された。
	教員の進路指導（進路目標を見据えた生き方指導）力の向上	・進路指導が単なる「出口指導」に終わることなく、 生徒が「学力＝生活力」であることを自覚しながら、その意識が「今・自分・権利」だけでなく、「将来・社会・責任貢献」へと開かれるような、生き方指導を行っている。 ・生徒の志望と適性を理解し、生徒にとっての望ましい方向性をイメージしながら、3年間のどの段階においても適切な助言を行っている。	・3年間の各時期の進路指導が、生徒の将来を見据えた一貫性のあるものでない場合が見られる。 ・それぞれの教員の進路指導（成功例や失敗例）が全教員に共有されていない。	・専攻科指導のノウハウを現役生にも活用することなどを踏まえ、新旧3年・専攻科担任会で提示された内容を共有化する。 ・全国的な情勢について、適切な時機をとらえて、教員・生徒・保護者に対して研修会を実施する。 ・キャリア教育の視点で生徒に対して講演会を企画・実施する。 ・全教員必修の研修機会を設定する。 ・学年主催の進路研修会に積極的に参加する。 ・転入教員に対し、本校の進路指導の要点を伝える研修を行う。 ・進路LHR計画の改善・充実。	*・新旧3年・専攻科担任会や判定会に全学年から多くの参加があり、「進路研修会」としての機能を果たした。* *・昨年度の指導の失敗例・成功例をデータベース化したが、その活用は十分とはいえない。* *・保護者・生徒を対象にキャリア教育の視点で講演会を開催し、教員自身も進路指導のあり方を再確認できた。* *・全職員研修として、面接・小論文指導の研修を行い、今後の生活指導や進路指導におけるHR運営の指針を得ることができた。*	B	・進路指導力向上研修を後期も実施する。**(A)** ・学年間の連携を密にし、それぞれの学年で必要な指導を適切に行う。**(A)**	・新旧3年・専攻科担任会や判定会に全学年から多くの参加があり、「進路研修会」としての機能を果たした。 ・1，2年の判定会では大学受験指導経験者のアドバイスをもらい、時期を逸しない進路指導力の必要性を共有した。 ・3年生は集団として、その意識が他者尊重へと向かっており、望ましい生き方指導ができたと言える。また、1，2年生にも同様の方向性がうかがわれる。	A	・生徒・保護者・教員向けの進路研修会の実施。 ・各学年の「判定会議」等を教員の研修機会とし、積極的に参加する。 ・学校訪問対応、中学説明会対応等の機会を研修の機会とし、多くの教員がその役割を果たす。

4．進路指導の充実	国公立大学合格者数の維持・発展	・地域を代表する進学校として相応しい実績の維持。 ・現役合格者数150名。 ・ブロック大学レベル以上合格者数現浪合計70名。	（現役合格） ・昨年度126名。一昨年度138名。一昨々年度142名。 （ブロック大学レベル以上合格者数） ・昨年度55名。一昨年度51名。一昨々年度60名。	・生徒の家庭学習時間の確保。 ・情報収集や大学訪問を通して、生徒教員とも大学研究を充実させる。 ・遅進者指導を迅速かつ手厚く行う。 ・定期テスト、課題テストの正確な実行と迅速かつ徹底した事後指導実施。 ・個別面談を随時行い、第一志望校合格へ向けての個別処方作成し、全教員が関わるバックアップ体制を強化する。 ・模擬試験の復習など普段の学習へのフィードバックを各教科で工夫する。 ・全国模試における各時期の到達目標偏差値を確実に達成する。 ・個別大学後期入試まで諦めずに粘り抜くための支援を行う。	*・3年生は順調に成績が推移している。* *・成績不振者に対する指導は粘り強く、手厚く行った。*	B	・タイミングをずらさない指導を的確に行い、軌道修正を図る。**（A）** ・各種の受験資料を活用した面談を充実させていく。**（A）**	・3年各担任が「学力＝生活力」を意識しながら、教科担当と連携し指導に努め、センター試験では過去最高の全国平均上回りとなった。 ・2年生・1年生も上昇傾向にあるあるが、科目によっては課題が見られる。 ・成績不振者に対する指導は粘り強く、手厚く行った。 ・模試ごとに面談を行い、学習のモチベーションが低下しないように支援した。	A	・生徒の学力実態を正確に分析し、具体的な対策・指導を遅滞なく行う。 （教科会の活性化）（スムーズな中高接続）（各回模試の偏差値目標クリア）（予習・授業・復習・週末課題・週明けテスト・模試等の有機的関連付けの再確認） ・定期的に面談を行い、適正な志望を維持する。 ・大学研究の継続実施。AO入試推薦入試の情報収集。
	難関大学合格者数の維持・発展	・地域を代表する進学校として相応しい実績の維持。 ・現浪合計20名以上。 ・東京大学5名。	（難関大学） ・昨年度17名。一昨年度12名。一昨々年度21名。 （東京大学） ・昨年度2名。一昨年度1名。一昨々年度1名	・教員による大学入試問題研究を充実させ、各志望レベルに応じた学力育成プログラムを作成し、低学年から一貫した指導を行う。 ・教員による大学見学などを通して難関大学の魅力を生徒に伝えていく努力をする。 ・教科と学年が連携し、超難関校課外講座を企画するとともに、個別指導も徹底する。 ・各学年の学術クラスの縦の関係を強化し、模試計画等を含めた3年間の育成プログラムをより確かなものとする。	*・一流の学者や予備校等のスーパー教師を招き、上位者の刺激面で大きな成果があった。* *・2年生は県の実施した難関大合宿に多数参加し、クラスのムードが一変する等、成果があった。* *・東大・京大個別模試を受けさせ、各人の課題を明確にすることができた。* *・今年は難関大希望者が多く、またカもある。*	B	・生徒の様子を注意深く観察し，最後まで自分の志望を貫くことができるようサポートする．**（A）** ・教科主体の難関校志望者支援対策を企画・実施する。**（A）**	・1年学術クラスは首都圏研修で刺激を受けた。 ・2年学術クラスは県主催の難関大合宿は岡山県での合同勉強合宿に参加し刺激を受けた。 ・東大数学合宿においては、2，3年・専攻科生が島根・広島の生徒と共にスーパー講師の授業に参加し、縦と横のつながりを拡げた。それぞれ、平素の授業態度や家庭学習のあり方を見直すきっかけとなった。 ・難関大学や東京大学をはじめとする「超難関」大学への出願数も出願数は期待通りとなった。	A	・文理学術クラスの縦のつながりを一層強化する。（チューター制度の活用、合同授業・勉強会等の実施） ・明確な目的を持った文理学術クラス検討会を定期的に開催し、一貫した指導を行う。 ・首都圏研修を改良、継続する。
5．専攻科教育の充実	鳥取県の専攻科として信頼される専攻科	・県内各地から集まった生徒一人ひとりが県立の専攻科である意味を理解し、学問に対して誠実に主体的に取り組んでおり、学力とともに人間力も向上している。 ・生徒一人ひとりの学力差に応じたきめの細かい指導により、潜在能力が引き出され、難関大学合格者が増加している。	・民間との競合という点から、昨年度鳥取東高専攻科が閉科となり、本校専攻科も米子東高専攻科と合せ、今後のあり方が平成21年度末までに決定されることになっている。 ・中部地区で幅広く認知され、本校以外の各高校卒業生が数多く志願し、入学している。 ・専攻科志願者はここ3年続けて定員を2桁以上上回り、特に本年は競争率1．43倍であった。 ・県立専攻科で学ぶ意義を認識すると同時に、真の学びに目覚めて修了する生徒が増加している。 ・近年順調に実績を上げると同時に、昨年度入試に続き、今年度入試でも東京大学に一人の合格者を出した。	（学びに向かう姿勢づくりの企画）と（自ら発信する学び、「見る・聞く」から「話す・書く」への転換） ・「学び祭」の実施（7月上旬） ・早朝学習の充実 ・読書のすすめ ・ルーム日誌の充実 ・特に超難関校志望者、基礎力未定着者に対する指導を全教員でバックアップする。 ・これまで以上に充実した3・専合同学習会の実施。	*・生徒は鳥取県の専攻科であることを自覚し、感謝の気持ちを持って主体的に学習している。* *・「学び祭り」を7月に全員で実施。「思考力」、「質問力」、「説得力」を大切に全力で取り組んだ結果、学習意欲が向上している。* *・目の前の受験に拘ることなく、将来を見据え、「人間力」を高める指導を行っている。* *・本校専攻科教育の趣旨について、各高等学校に対し、機会を捉えて積極的に説明するよう努めている。*	B	・生徒一人ひとりの状況を把握し、面談等を通じて、各自の志望に応じた適切な指導を遅滞なく行う。	・出身校と連携を取り、適切な指導に努めた。 ・各教科・定時制を含めた全職員の支援・指導のもと、成績を向上させることができた。	B	・「学力＝生活」を徹底し、高校生の模範となるべき専攻科生を育成する。 ・生徒一人一人の状況を把握し、各方面の支援・指導をもとに、各自の志望に応じた適切な指導をタイミングを失することなく行う。
6．定時制教育の充実	退学者・休学者の減少	・教員は、あらゆる機会を捉えて、生徒理解に努めている。 ・生徒が規律とけじめのある基本的な生活習慣を確立している。 ・わかりやすい授業を行うことによって、生徒の基礎学力が定着している。	・近年、生徒たちは落ち着いてきている。 ・様々な事情により支援及び指導を必要とする生徒が多い。 ・学習意欲が希薄で、学習面で厳しい生徒が少なくない。	・面接や家庭訪問・職場訪問を実施する。 ・情報交換会を実施し、職員連携を密にする。 ・授業評価や公開授業を実施し、授業改善、指導方法の向上を図る。	*・全職員による公開授業、授業評価、研究授業を実施。生徒の授業評価は高く、態度も落ち着いている（B^{+}）。* *・学力差が大きく、基礎学力の定着には一層の工夫が必要である（B^{-}）。* *・社会で通用するよう時間厳守を指導しているが、SHRの遅刻が減らない（B^{-}）。* *・問題行動には保護者と連携し、素早く粘り強く、全職員で当たっている（A）。*	B	・基礎学力の定着に向け、基本的な生活態度を育みながら、授業展開の工夫を一層図る。 ・指導方針を再確認し、その共通理解をもとに、生徒個々をよく理解し、粘り強く指導する。 ・保護者に文書を送り、一層の連携を図る。改善がみられなければ、保護者と共に対策を話し合う。	・全職員による公開授業、授業評価、研究授業を実施。 生徒の授業評価は高く、態度も落ち着いている**（A）**。 ・学力差が大きく、基礎学力の定着には一層の工夫が 必要**（B）**。 ・社会で通用するよう時間厳守を指導したが、SHRの遅 刻に関しては一層の指導が必要**（B−）**。 ・問題行動には保護者と連携し、素早く粘り強く、全職 員で当たった**（A）**。	B	・基礎学力の定着に向け、基本的な生活態度を育みながら、授業展開の工夫を一層図る。 ・指導方針を再確認し、その共通理解をもとに、生徒個々をよく理解し、生徒の自己実現に向け、粘り強く指導する。 ・保護者に文書を送り、一層の連携を図る。改善がみられなければ、保護者と共に対策を話し合う。

○ 評価基準

A　本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80%以上になっている。

B　課題はあるが、改善に向けた取り組みが効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、50%～80%の範囲内になっている。

C　改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。一定の成果が上がっているが、課題も多く、今後の改善があまり見込めない。数値的目標を掲げた項目では、最高でも50%未満である。